

次の時代を作るのは今を生きる子どもたちだ。

その子ども達に現代（いま）は、尚早に「将来何になるのか」を具体的に考えさせる。これは無理があるように思えてならない。本来、自分の生き方を模索していく思春期には、本物の学びとたくさんの実体験を積み重ね、多様な人と出会い、自分の世界を広げていくことが大事なのではないだろうか。早期に選択肢を狭くしてしまうことは、大人たちの都合で子どもたちの未来を奪ってしまっていないか。人生なんて「いろいろやってみなければわからない」のだ。生きている実感積み重ね、自分の生き方をみがきながら掴んでいくのだと思う。今を生きる中高生たちもそうあって欲しいと願うばかりだ。

ニール・ヤングを聴き青春時代を駆け抜けた「白髪のニール」富田先生は、高校教師になり、自身が親になることをきっかけに、教え子の長谷川に「ニール・ヤング」をギターの弾き語りで歌えるようにしてくれと頼み込む。

ここから物語は始まる。そして、この一つの出会いが二十数年後の若者たちを突き動かしていくのだ。富田先生は自分の生き方を模索し続ける。長谷川もフクちゃんも自分と向き合い、前に進もうとあがく。そして現代（いま）の高校生たちも悩み、苦しみながら「自分を生きたい」という気持ちを育てていく。

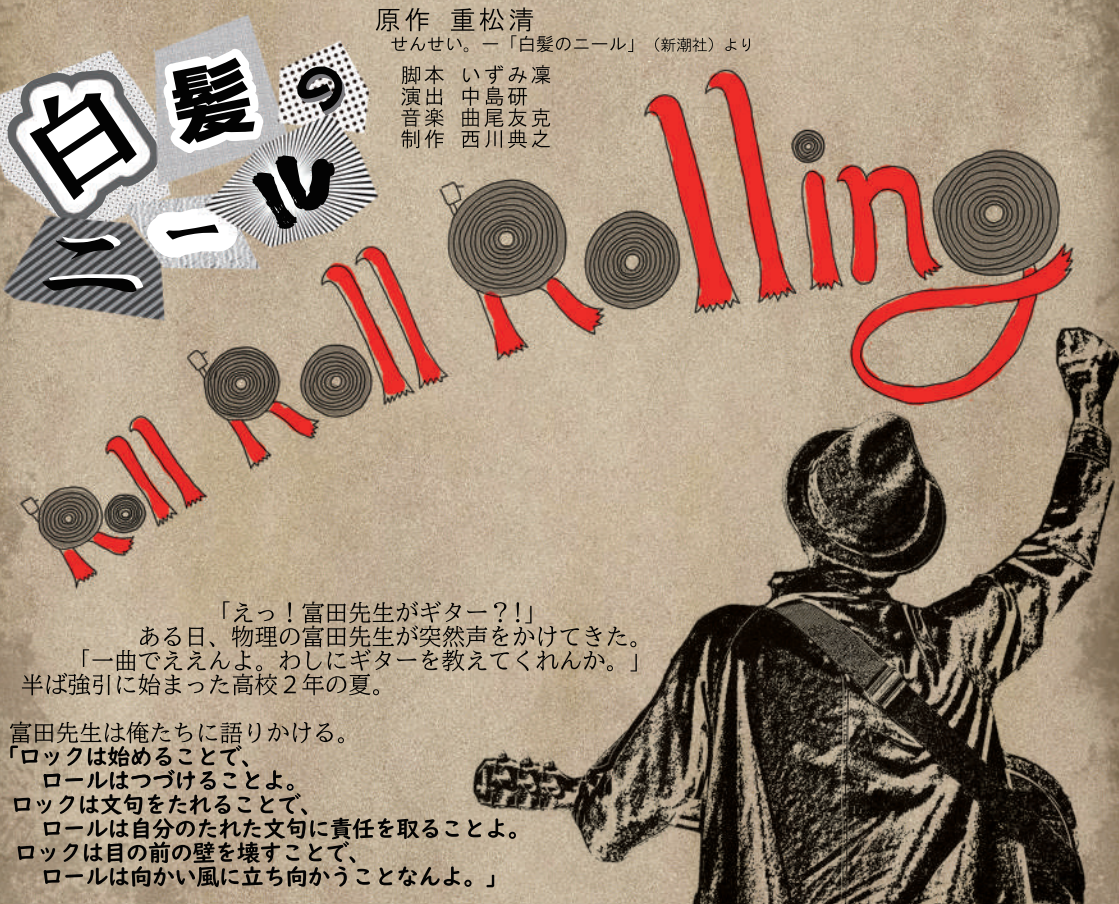
富田先生と教え子たち、そして世代を超えた教え子同士が出会い、富田先生に刺激され、自分の道をロックしながら、ロールしながら…物語が、未来が、転がり続ける。

制作：西川典之

原作 重松清

せんせい。ー「白髪のニール」（新潮社）より

脚本 いずみ 凜
演出 中島 研
音楽 曲尾 友克
制作 西川 典之



「えっ！富田先生がギター？！」

ある日、物理の富田先生が突然声をかけてきた。

「一曲でええんよ。わしにギターを教えてくれんか。」

半ば強引に始まった高校2年の夏。

富田先生は俺たちに語りかける。

「ロックは始めることで、

ロールはつづけることよ。

ロックは文句をたれることで、

ロールは自分のたれた文句に責任を取ることで。

ロックは目の前の壁を壊すことで、

ロールは向かい風に立ち向かうことなんよ。」

